

シンガポールの生活を支える海事産業 ～Singapore Maritime Gallery～

シンガポール事務所

シンガポールには、ガイドブックでは紹介されていないギャラリーがあります。都市計画、住宅整備、緑化事業、都市交通などテーマは様々ですが、いずれも、シンガポールの重要な政策を国民に伝えることを主たる目的としている施設です。そんなギャラリーのひとつで、海事産業をテーマとしている「シンガポール・マリタイム・ギャラリー」を訪れました。

1 施設概況

シンガポール・マリタイム・ギャラリーはシンガポール海事局（MPA：Maritime and Port Authority）が所管する施設です。

海事関連の教育と広報を行う目的で2012年9月に開設され、シンガポールの学校が校外学習の場として活用している他、国外からの視察も多く受け入れています。実際に使用されているコンテナを展示し、船舶航行コン



エントランスロビー

トロールシステムやウォータータクシー（通船）

の操縦を体験できるコーナーを備えるなど、来館者の関心を惹きつける工夫が満載の施設です。また、グループでの視察は予め予約をすれば館内を案内してもらうことができます。

（無料：2014年10月現在）

2 ギャラリーの役割



ギャラリー内案内図

国を挙げて海事教育を実施する背景には、輸入されたものに囲まれて生活をしているシンガポール社会と、それを支える海事産業の重要性を国民に理解させることで、港湾政策を効果的に推進することにあります。国民が食やエネルギー資源など日常生活や経済活動に欠かせないものまで輸入されていることを知ることは、海

事産業を支える港湾の重要性を認識することにつながります。ギャラリーでは、港湾に従事する様々な職種が海事産業を支える重要な職業であ

るとして紹介されています。これらの展示は、将来の港湾政策を担う人材となる児童・生徒に対するメッセージ性が高いと感じました。

3 様々な展示物

エントランスロビーに置かれているのは、かつて船首に設置されていた「鐘」です。

現役時代には、航行中の他の船や陸上との交信に利用されたり、船員に時を知らせる役目などがあったそうです。建物内のため音は調整されていますが、自由に触れて鐘を鳴らすこともできます。先に進むと現れるのは、野菜や果物、テレビやパソコン、薬など身の回りにあるものの性質、必要性、重要性、主な輸出国等の情報をアニメーションで伝える装置です。



この画面のテーマはファッション



初入港したコンテナ船「日本丸」の模型

次に、シンガポールが小さな漁村から世界有数の大都市に発展するまでについて、港の歴史をたどりながら学びます。シンガポールは、1819年にイギリス人のトーマス・スタンフォード・ラッフルズ氏が上陸したことで知られていますが、シンガポール港の歴史パネルでは、14世紀に遡ってシンガポールが既に港として機能していたことが紹介されています。また、1972年に東南アジア地域では初となるコン

テナターミナルが完成し、竣工後初めて入港したのは、オランダのロッテルダム港から300のコンテナを載せてやって来た「日本丸」と言う名のコンテナ船でした。歴史コーナーの最後にはその模型が展示されています。

さらに、シンガポール港内で提供されるサービスについて、高度なオートメーションシステムによって24時間スムーズに稼働している点や、取扱い貨物の約9割がトランスシップメント（積み替え貨物）であること、環境対策や港内秩序の維持にも力を入れていることなども説明しています。また、右の写真は承認基準が厳しいことで知られるシンガポールの民間用海上旗で、厳しさ故に海外港での信頼も高いということです。シンガポール市場で流通しない積み替えのために、荷上げされものは無税で保管が可能となるFree Portシステムと合わせ、世界に向けてシンガポール港の利便性と安全性をアピールしているのです。



シンガポールの国章を模したデザイン

4 次世代の教育

生活必需品のほとんどすべてを輸入に頼らなければならないシンガポールですが、その脆弱性が、港と海事産業の発展の原動力となっています。シンガポールの GDP の 7% に貢献し 17 万人の雇用を生み出す海事産業は、シンガポール港湾政策の重点施策に位置づけられているので、その担い手の育成もまた重要な事業です。このギャラリーでは、展示物の高さや説明文の表現など子どもの来館者を意識した工夫が随所で見られました。海事産業への関心を引出す教育施設として、人材育成に大きく貢献することが期待されます。

(鈴木所長補佐 東京都江東区派遣)

